

論説

自死遺族支援

6年前の夏の夜、本県の30代女性は父を自殺で亡くした。その時の記憶は、満天の星空とともにある。

女性は当時、首都圏在住。盛岡近郊で父が自ら命を絶した時刻には「ちょうど星空を見上げていました」。連絡を受け帰郷したが、葬儀には立ち会えなかった。

「父は最期、どんな顔だったんだろう。なぜ死を選んだのか。自分はなぜ早く気づけなかったのか」。問いが、頭の中をぐるぐる回り続けた。自殺（自死）が社会問題化して久しい日本で、特に深刻

特有の深い悲嘆に理解を深め、支援の充実を図りたい。県精神保健福祉センター（盛岡市）と県内8保健所では、遺族同士で語り合い気持ちを分かち合う「こころサロン」も定期開催している。

なのが本県。厚生労働省の人口動態統計によると、2013年の本県の自殺者数は340人。人口10万人当たりの自殺者数は26・4人で、秋田県

悲嘆に寄り添う社会に

父を失った女性は3年前から、遺族同士の語りや、心なれば」と励む。震災は、遺族支援に複雑な影を落とす。津波でも多くの遺族が残された。その上、震災関連自殺は今年9月末現在で計32人。現状では減少傾向にあるが、復興の遅れに伴う増加も懸念される。

に次ぎ全国ワースト2位だ。

発症のリスクも高まる。

の病の当事者と家族の集いへの参加を通じ、悲嘆から少しづつ回復。現在は東日本大震災被災者支援にも携わる。

そんな中、いかに遺族に支援の手を差し伸べるか。簡単な方法はないだろう。気仙地区の保健医療福祉関係者が連携して取り組むように、住民相互の支え合いを促進する過程で、遺族の心情への理解、こころサロンなどの周知を地道に進めるほかない。

1人の自殺は、少なくとも周囲の5〜10人に深刻な影響を及ぼすとされる。自殺対策では傾聴ボランティア養成、ちで、家族内に問題が発生する病の当事者と家族の集いへの参加を通じ、悲嘆から少しづつ回復。現在は東日本大震災被災者支援にも携わる。

「人は悲しみを抱えている」と、うつむきがちになる。自震災を経験した本県だからこそ、悲しみに寄り添う人と人とのつながりを広げたい。

体制整備などとともに、自死遺族フレットの配布、講演会の開が、上を向いて生きる一助に

岩手日報

2014.11.21

岩手日報

2014.11.21

計士風

2014・11・21

「涙を蒔いて喜びを刈る」。作家井上ひさしさんの戯曲「イーハト

ーボの劇列車」の主人公、宮沢賢治の言葉だ▼ひた走る列車を舞台に、賢治と乗客たちが繰り広げる悲喜劇。東日本大震災で大きな被害を受けた陸前高田市の支援を続ける保健師が、この言葉を心の支えにしていると聞き、早速戯曲を読んでみた

▼鉄路を人生になぞらえれば、同じ時代を生きる私たちは同じ列車に乗り合わせた乗客。だが、震災で多くの人ががやむを得ず途中下車した。ならば、なお列車に乗り続けている私たちが、蒔かれた涙を何とか喜びに結実させたい▼10日死去した俳優高倉健さんは、鉄路が似合う男だった。映画「網走番外地」での、トロッコに飛び乗っての決死の逃避行。あるいは「鉄道員(ぽ

っぽやん)」での、雪降る中、ローカル線の小さな駅に立ち続ける駅長。印象深いシーンは数多い▼武骨で寡黙ながら、たたずまいはいつも雄弁。社会の片隅で、地道に生きる庶民の男らしさを演じ続けた。被災地に強い思いを寄せ、がれきの中で水を運ぶ少年の写真を台本に貼り、自らを奮い立たせていたという▼その健さんもついに「下車」した。残された私たちが列車を走ら

せ続けたい。地道に生き続けたその先に「黄色いハンカチ」がはためていることを、健さんは教えてくれた。